

## 前序 歎異のこころ

一。「聖光」紙上において、長い間『遺教経』を頂きまして、世尊の最後の慈悲を頂戴致しました。世尊は、生死無常にさめて早く解脱を得よと、繰返し繰返し仰せになりました。今度は、何を頂こうかと思案した私に、『歎異抄』を頂けと決定して下さったのも、世尊の慈悲でありました。私どもは念仏道によらねば救われない、解脱は得られない。しこうして『歎異抄』は、わかりやすく、念仏道を私どもに示してくださるからであります。

一。『歎異抄』は、誰が製作したかわからないお聖教であります。いろいろな説もあるようではありますが、私は、わからぬものは、わからぬとしておきます。しかし「先師口伝之真信」とあるのを見ると、聖人の直弟子がお書きになったものだと思われます。著者自らが、自分の名をかくしていられるところにも奥ゆかしいものを感じることができます。己をかくして聖人を出しているのです。

一。本書は、何のために書かれたのでありましょう。本書製作の動機は何であるか。それは、本書の序文を読むと明かであります。まず本文のままを出します。

「竊廻愚案粗勘古今。歎異先師口伝之真信、思有後学相続之疑惑、幸不依有縁知識一者、争得入易行一門哉。全以自見之覚悟莫乱他力宗旨。仍故親鸞聖人御物語之趣、所留耳底聊註之。偏為散同心行者之不審也云々。」

「竊ひそかに愚案めぐを廻めぐらして粗ほぼ古今こんを勘かんふるに、先師くでん口伝くでん之真信しんに異なることを歎なげき、後学相続ごがくしゆくの疑惑ぎご有ることを思ふに、幸いかにに有縁いふの知識ちきに依らずんば、争いかにか易行いぎぎやうの一門いっもんに入ることを得ん哉や。全く自見じけん之覚悟かくごを以て他力たうりきの宗旨しゆじを乱みだること莫なれ。仍なほて故親こしん鸞聖人御物語ごものがたり之趣しゆ、耳みみの底そこに留とどまる所ところ聊いささか之これを註しゆす。偏ひとえに同心行者どうしんぎやう之不審ふしんを散ちぜんが為ため也なりと云々うんぬん。」

一。「竊ひそかに愚案めぐを廻めぐらして粗ほぼ古今こんを勘かんふるに、先師くでん口伝くでん之真信しんに異なることを歎なげき、後学相続ごがくしゆくの疑惑ぎご有ることを思ふ」

愚案とは、愚かなる考え。いろいろな思案をめぐらして、聖人御在世の昔と今とを比較して考えるに、先師口伝、親鸞聖人の口ずからお伝えくださった真の信心に異なるところの、教えや信心が世に流布されているのを歎なげき、後から他力の法門を学ぶ者に疑いがあるであろうことを思う。この「異なるを歎なげく」ということが、本書が生まれて出た動機であります。『歎異抄』の著者は、聖人からじきじきにみ教えを聞かれた。それは、大無量寿経のみ教え、聞其名号信心歡喜と、絶对他力の本願の救い、清浄真実の信心の獲得、人間の汚い自力を入れない純粹のお念仏の世界であったのであります。しかるに、いつしか、清白の大法に人間の汚い考えを混入し、自力のはからいを

まじえてくる、そこに「異なる世界」がはびこつてきたのでありましょう。それは、その当時に限ったことではありません。いつの時代でも、こうした歎かわしいことが繰返されます。現代もまた、ずいぶんと勝手な法門が横行している時であります。私どもは、本書の著者とともに、歎異のころをを持たずにはいられませぬ。まことに現代ほど教えが渾沌としている時はありますまい。そして、我も人も、人を見さえすれば、「異解者」「異安心」と言いあいます。お同行たちは、少しでも自分の勝手の悪い、正しい教えに会えばすぐ、「これは異安心だ。」貼札はりふだを講師の上にしめます。悪業のまま「その身そのまま」と、貪欲のまま、無反省に通してくれる教えなら、それが墮落しきつた売談僧であろうと、何であろうと、ご正意だとします。昔は、異解者だ、異安心だと言われることは大変なことでありました。しかるに現代では、それすら何のことかわからなくなつたほど迷うた時代であります。せつかく正しいものが現れても、それが自分の勢力を持ちつづけるのに都合が悪ければ、なんら深い探索もしないで、一も二もなく異安心だと、嫉妬心や、反逆心や、名利心のために、安やすと異安心よばわりをします。また一方には、自由勝手に法門をまげて歪めて、時代にあうように、流れに投ずるようになります。中には「僧衣そういを着た神官」と言われる人さえ出ます。いずれもいずれも真面目に、この歎異の心に帰り、正しく聖人の教えに生きねばなりません。私どもは、聖人のみ教えをそのまま私の勝手に入れなくて領解させていたらくことを心がけてきました。読んでも下さらず、聞いても下さらない人から、「異解者」と言われるのは致し方のないことではありますが、ほんとうに異解者であつてはなりません。ほんとうに異安心であることは恐しいことでもあります。

一。「幸に有縁の知識に依らずんば、争いかにか易行の一門に入ることを得ん哉。全く自見之覚悟を以て他力の宗旨を乱ること莫なれ。」

縁のある善知識によらなければ、他力易行の一門に入つて、正しく信心決定し、念仏の行者となることはできない。仏法では、伝統ということが一番重んじられます。血統がなければ今日の私がないように、大法にも流れがあります。釈尊、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然、親鸞と、一脈の教法の流れが、伝え伝えられてきたことを伝統というのであります。どんな賢い考えでも、伝統を持たない考えは、空想であります。いかにすばらしく見えても、伝統のない一個人の考えは、だめでありませぬ。念仏道は過去の聖賢の上に、教えが身を以て行じられて、精練されて伝えられてきたものであります。その伝統を無視して、自分の賢いを出し、勝手な考えを入れることを「自見之覚悟」というのであります。他力の宗旨を乱るものは、この自見の覚悟を入れるからであります。自分が迷うだけでなく、人をも迷わせます。私どもの善知識は、親鸞聖人であります。聖人のみ教え、聖人のご信心、聖人のご生活を、まことに合掌して頂戴しなくてはなりません。

一。「仍よて故親鸞聖人御物語之趣、耳の底に留いまる所聊さか之を註しす。偏ひとに同心行者之不審を散ためぜんが為也。」

聖人が親しくご教化あそばした、その御物語の趣を、同心行者の不審を晴らすためにこれを書きしるすと言われるのであります。私どもは著者の御心に同心することができます。まことに親切であります。念仏の底に光る信心の智慧は、著者をして破邪顕正の筆を持たせずにはおかなかつたのでありましょう。そこには厳として無視することのできない師教が光っています。自見之覚悟をさしはさまざる、無我の態度が打ち出されております。

一。なお、著者は、その総結の文に次のように記しています。

「まことに、われもひととも、そらごとをのみ、まをしあひさふらふなかに、ひとついたまじきことのさふらふなり。そのゆゑは、念仏まをすについて、信心のおもむきをも、たがひに問答し、ひとにもいひきかすとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたたんために、またくおほせにてなきことをもおほせとのみまをすこと、あさましく、なげき存じさふらふなり。このむねをよくよくおもひときこころえらるべきことにさふらふ。

これさらに、わたくしのことばにあらざといへども、経釈のゆくちもしらず、法文の浅深を、こころへわけたることもさふらはねば、さだめてをかじきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむきを百分が一、かたはしばかりをも、おもひいでまいらせて、かきつけさふらふなり。

かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土にうまれずして、辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをするす。なづけて歎異抄といふべし。外見あるべからず。」

誰も彼もそらごとばかりの中に、一つ痛ましいことがある。それは、ご法談について互いに話しもし問答する時、他人の口をふさぎ、相論を断たんために、聖人の仰せでもないことを仰せだと言うことである。それは信心ではなくて、邪見傲慢である。痛ましく、嘆かわしいことである。そこで、著者は「これさらに、わたくしのことばにあらざ」と、聖人より承りたるままの信心を書きのせたることを示し、しかしながら、経釈のわけがらも知らず、法文の浅深も心得わけていないから、さだめておかしいことであろう、と自らを謙遜しつつ、けれども、故聖人の仰せごとの趣をかたはしばかりも思い出して書きつけたのである。「かなしきかなや。さいはひに念仏しながら直に報土に生まれずして、辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをするす。」泣く泣く筆を染める、そこには、深い智慧のひらめきと、熱い涙が現れています。まことに『歎異抄』は、聖人の教えに対する著者の無我の態度と、鋭い智慧の輝きと、念仏行者に対する深い慈悲の涙によって生れたものであります。

一。この『歎異抄』を頂くについて注意しなければならぬことは、本書の後につけられた、蓮如上人の奥書であります。いわく

「右斯聖教者為当流大事聖教也。於無宿善機無左右不可許之者也。」釈蓮如判

「右斯の聖教は、当流大事の聖教とする也。無宿善の機に於ては、左右無く之を許す可からざるものなり。」

文面に明かであるように『歎異抄』は、浄土真宗において大事なお聖教であります。大事なお聖教であるということは誤りということではない。しかし信心決定しないところの無宿善の機に、これを弄ばすということとは、恐しいことである。わけもなくこれを許してはならない。何ゆえにかくのごとく仰せられるのでありましょう。これは昔から言われるごとく髮剃かみそりのごときお聖教だからであります。合掌して頂くことによつて、一切衆生の悪業は断ぜられて救われますが、もし自力によつて弄べば、自他を傷つけるがゆえであります。まことに心して頂かねばなりません。先覚たちが世の中に出して下さったことはありがたいことでもあります。しかしこれを得手勝てしやう于にとり、部分々々を抽象して弄んだがゆえに、世の中には随分とそのため自他を傷つけた人もあるようであります。それでは著者の歎異の心は再び蹂躪じゆうりんせられるわけであります。歎異の歎異が必要になりました。まことに心すべきであります。以下順を追うて頂くことに致します。